

LOVIN' HYOGO

地元を愛する人のための「地元を愛する」ストーリー

縁。生まれ育った場所との縁。ふと訪れた場所との縁。そこで出会った人との縁や、仕事での縁、人がつないでくれた縁。いろんな縁がありますが、縁ができることで、その人にとっての「地元」になったり、「地元への愛」がより深まったりするのではないのでしょうか。実は兵庫には、そんな「縁」から広がった地元を愛するストーリーがたくさん。兵庫の各地で生まれている、さまざまな形の愛を、たっぷり紹介します。

CONTENTS ■すこいすと / 高校生チャレンジ留学 / TSUNAS / ひょうご農林水産ビジョン / ひょうご・こうべ女性活躍推進企業 / コ・ホ・シ / ひょうごTECHイノベーションプロジェクト / ひょうごオープンファーム / 多文化共生社会検定実務者会議 / すこいすと / リメンバー117 / ひょうごビジョン2050 / 万ばくばく一勝手に楽しむひょうごフィールドバリエーション / ひょうごSDGsスクールアワード / 私にとってのYELL / HYOGOミュージアム魅力発信プロジェクト / 兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会 / ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」

丹波市 居場所・役割 ひとの動き

誰もが心地よく集まれる“場”で、出合いを生み出す

「すこいすと」のひとり、清水健矢さん。24歳のとき生活の利便性が高く山に囲まれた田舎に住みたいと丹波移住を決意しました。空き屋になっていた「水分裂茶屋」を交流を生み出すコーヒースタンドとして復活させ、さらに自然豊かな青垣地区にはコワーキングスペースもオープンするなど自ら楽しみながら地域おこしを行っています。「ダーツやバーベキューができる秘密基地みたいな空間も作って、メインスペースでイベントを開けるようにして、地域で働く人たちがゆるく繋がれたら。今は起業セミナーや大学教授を招いてのワークショップ、アパレルのポップアップショップなど活用の幅が広がって地域外との交流も生まれてきたので、この流れが広がってこれたらと思います」

／ 清水さんのインタビューはこちらでも読めます ／

すこいすと

「自分×仲間×地域」の熱量を伝える「ひと」。すこいすとを紹介するウェブメディア。すこいすとたちの活動を通して、地域の活力となる「夢」と「協働」のヒントを発信しています。



「すこいすと」WEB



まわりの人々には幸せでいてほしいそのほうが僕も楽しいですからね



くう。すむ。おこす。

多様な学び・働き方

ラグビーの「楽しみ方」をニュージーランドで体感、日本で発信！

高校で先輩に誘われて、「たまに始めたラグビーにハマってしまった」という石井さん。「体のぶつかり合いも面白くて、人生をかけてやりたかった。今はラグビーが大好き。でも日本ではまだ競技人口も多く、面白さが世間に伝わっていないのがもったいない」。そこで「高校生チャレンジ留学」を活用してラグビーの本場・ニュージーランドに留学し、強豪校の練習に約4週間参加することに。「現地では公園の芝生にラグビーのボールが立っていたり、学校でも昼休みに皆でラグビーをしたりラグビーが暮らしの一部になっていた。印象的だったのは、日本だと「部活」や「プロ」として厳しい練習を重ねて……というイメージですが、現地ではとにかく「楽しむ」ことが大切にされていること。チームプレイでも、ミスしたら「何やってんねん!」「じゃなくでドンマ!」気にすんな。」という感じで、皆で気分を上げながらプレイする姿勢にグッときました。帰国後は現地で学んだ「楽しみ方」を、自らのプレイに乗せてチームメンバーと共有。真剣に、そして楽しく、高校生の挑戦から、新たなスポーツへの取り組みが兵庫に広がっていきます。

／ 留学した学生たちのインタビューと動画を公開中 ／

高校生チャレンジ留学
～HYOGO高校生「海外武者修行」応援プロジェクト～

兵庫で学び、グローバルな視点・能力を持つ若者を育成するため、留学先で働くの学びを深めたいとチャレンジする高校生を官民協働で支援している取り組み。

担当のこんな思い

若い段階から世界を肌で感じること、国際的な視野の中で自分の目標や地域の魅力を再認識することにつながり、何ものにも代えがたい財産となるはずです。留学に挑戦する若者が増えていくことを期待しています。



「高校生チャレンジ留学」WEB



ラグビーのおもしろさを日本に伝えるために、ラグビーがポピュラーな国でプレイしたい!

つながり人も、つながりたい人もにぎやかに集まった一日!

カケルDAY ひょうご地域創生フェス2025

2025年8月30日に「KITTO」で開催され、会場は一般参加者を含め約3,000人以上にぎわいました。当日の会場の様子をレポートします!



出展者も参加者も、業種や分野を超えて、皆刺激的な交流を楽しんだ。

ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」とは

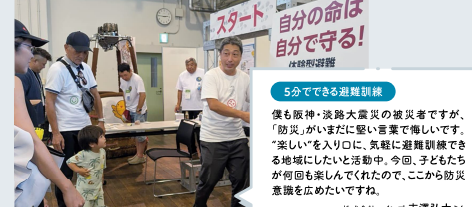
各地で地域活性化に取り組むプレイヤーが一堂に会し、交流・発表を通じた出会いと価値を生み出すことを目的とした「地域創生が体験できるフェス」。



詳しくはこちら



福祉活動のPRブースでは、思考力・体力を育む忍術体験が人気!



5分できる避難訓練

僕も阪神・淡路大震災の被災者ですが、「防災」がまだに堅い言葉で備えています。「楽しい」を入りに、気軽に避難訓練できる地域にしたいと活動中。今回、子どもたちが何回も楽しんでくれたので、これから防災意識を高めたいですね。

株式会社マイズ 末澤弘太さん

炭×林業⇒地域活性化

神戸で炭火焙煎珈琲を提供していますが、今後は「炭×林業」で地域貢献がしたい。今日は販売のかわらぬ多くの人と交流し「人手が少なくてもできる農業」のアイデアをたくさんもらいました。異業種交流ができる機会は貴重ですね。

炭火焙煎 萩原英治さん



2メートルを超える大工体験も、リズミカルな作業が会場に響いた。



工作などの体験型アクティビティを楽しむ子どもたちの姿も▶

バタがほ大作戦!

バターナッツがほちゃん人気野菜にするため参加しました。「バタがほ大作戦」は地域のコミュニティづくりが目的。子どもは敷地を通して計画性を学び、困ったときは大人に聞くことで問題解決力も育ちます。バタがほを起点に地域を盛り上げていきます!

いなかラボ 代表 池田泰樹さん



淡路島×建築×ウェルビーイング

最先端の技術で全部つくるのではなく、地方の個性を活かしたものがいい。今回の淡路島を中心に仲間が増えたといい、島の地にピンを立ててもらった企画を、ビンにルールはなく、おすめの場所でも「おひいちゃんの家」でもOK!最後にはいろんなピンが立ち、交流も生まれて楽しかったです。

建築家 森健二さん

あこがれ発信基地



ステージイベントも大盛り上がり!



どのピンもアイデアと地元愛に満ちたものばかり。多くの聴衆から質問も飛び交った。

フェスに参加されたアクション委員会委員より一言

地元の学生も巻き込んでプレイヤーの活動をもっと盛り上げたい!

横間 土のつながりによって地域の活動はもっと元気になる。交流による価値創造へ地域創生と繋ぎ

カケルDAYの盛況ぶりにびっくり!プレイヤー同士のつながりは県の力になるはず

カケルDAYをきっかけに人の想いがカタチになっていく素晴らしい!ぜひ継続したい

「誰かのために」が原動力になっている活動が、これこそ「ひょうごらしさ」ではないか?

アクション委員会って?

地域創生のプロジェクトをさらにパワーアップさせるため、現場の最前線で活動するメンバーが集結。「兵庫県地域創生アクション委員会」では、兵庫に変化を起こすべく、どうすればもっと地域が良くなるか、想いが伝わるかについて、特にとらわれのない自由なアイデアをぶついています。

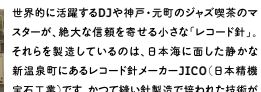
地域創生特設サイトOPEN



07全P2-069A3

地元への愛が、地元の暮らしを守る。地元への愛で、新しい世界を切り拓く。

日本海に面した静かな町で 職人が手作業でつくる レコード針



DJのSHINさんは「最初は他メーカーの交換計として使い始めたが、使い始めたらその音質や耐久度も申し分ない。JICOが日本の会社、しかも自分と同じ近畿圏だと知りて驚きした。MADE IN JAPANの技術力を持つことに会社、そして職人さん達もみんなの心にも知ってほしいですね。アナログレコードが流れる中でも「注文がある限りつくり続ける」という企業姿勢にも感銘を受けたそう。新温泉町の澄んだ空気と海のない、人の手がやり込んでいない意味で時が止まっている「場所からこそ可能な、微塵もないつくり。新温泉町さんでJICOの職人さんたちがワールドクラスの音」を「つくり出したい」。



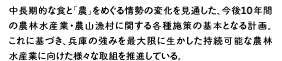
SUNAS (U)
WEB

東播磨エリアの暮らしを支えるJA兵庫南。地産地消や食の大切さを発信するなど「地域で安心できる暮らしづくり」を、女性の働きやすい環境整備によって自ら実践。時差出勤や時短勤務などを奨励している。



海の底を耕して、
命が巡る豊かな海を守る

長年海苔の養殖に携わってきた明石浦漁業協同組合の夜本組組長、1990年代後半からこう海苔に「色落ち」の現象が目立ち始めたそうです。原因を調べてみたところ、海苔の生産に必要な養分などの「栄養塩」が不足していることが判明。「昔は山から川を伝って多くの栄養が海に流出し出た。ダムや堰ができて水処理場も整備された、それが海に流れ込んだらなくなった。でも海底には栄養が溜まっているやんという話も聞いてね。これを流路の漁師が思い当たって思いついたのが」と海苔餅子さんを始めたことがきっかけと語られています。海苔餅子さんは、専用の鉄製器具を漁船で引っ張り、硬いな海底を耕すことで堆積した栄養分を海中に放出させる取組です。「親の代から始めてくれた養殖家な海苔を、孫の世代まで残したい、一番現場に近い私たちが漁業をしている漁師が感じているのを、お目に伝え、今できることをやらあめんとしています」。栄養が豊富で多様な生物が生き豊かな海を守り続けるための未来への第一歩が、ひょうここの海で始めています。



女性の“働きやすさ”は
みんなの“働きやすさ”を生み出す第一歩

企業が「企業の取組姿勢」「キャリア形成支援」「女性の登用促進」「女性の定着促進(処遇・定着、多様な働き方の支援)」の4つの柱・20項目について自己評価を行い、14項目以上を達成した企業を認定する事業。

女性がまだまだ少ない職場と思われる建設業や製造業でも定数取得が広がっています。県内各地でのキャリアアップはもちろん、男性育休の推進等「誰もが働きやすい職場づくり」が進むことを目指しています。若い世代にもミゾガ企業を知ってもらいたいという思いから、県内学生とタッグを組み、SNS等によるミゾガ企業の魅力の発信を行っているのでぜひチェックしてみてください。



「ミモザ企業
就活女子×理想の働き方
＠兵庫」
Instagram

地球温暖化が進む中でも 育てられるお米を開発

年々歳々を増す夏の暑さ。実は、猛暑は人間だけでなく「畜」をも苦しめます。高温にあさらせたお米は白く濁ってしまい、品質や収量が落ちていってしまいます。そのため農家の生産意欲も低下してきています。こうした問題はお米の産地がなくなればなくなれば………と危機感から「暑」に負けない新品種の開発が2016年にスタートしました。上記のすは兵庫県立農水産学技術総合センターの畜産研究員、奥村一樹(かずき)氏から聞かされた新品種の開発を、何人かで今年度9月中旬までつくってしまえ！と高温環境を再現できる装置から開発したのだそう。1種以上のお品種候補をつくらせて、どうと兵庫アグリゾナリョのブランド米2025年9月収穫まで進めました。その名も「フコ・ハン」。もちもちと弾力よく仕上げたにぎみ、上の中央を食す。



地球温暖化による夏の猛暑で、既存品種の品質・収量が低下しているという課題を解決するため、夏の暑さに強く、おいしい新品種の育成に取り組み開発した品種、地球のことを想い、強とJAグループ兵庫が協力して生み出したお米であり、持続可能な未来への願いが込められている。

「コ・ノ・ホ・シ」
WEB



空き家になった 古民家と人をマッチング



そこに広がるのは、江戸時代から続く宿場町——神河町の中村・栗葉町は生野銀山の手前の増場寺として知られるエリア、しかし古民家が並み美しい街並みは、近年になって空家が増え、古民家の取壊しにより歴史が断絶しつつある。その手を挙げるのが一般社団法人 HITOTO。「ひょうこTECHノバージョンプロジェクト」により、古民家オーナーとそれを活用したい人のマッチングに挑戦！街並みを活する「まちも」仲間を増やすことで歴史的景観を未来につないで、未来に兵庫の「宝」を継承する活動です。

スタートアップ等が持つ革新的な技術を活用して県内の社会課題解決を図り、その成果を同様の課題を持つ県内外市町への横展開を支援する事業。

今回、都心部と町内にある古民家でトークイベントや内覧会などのワークショップを開催。町内では業者を行き移住者や空き家オーナー、移住検討者との関係構築によって、空き家の利用希望を出る成果に至りました。実践後も、神河町とHITOTOによる地域の魅力や価値向上につながる取り組みを継続していきます。この知見を、空き家問題を抱える自治体へ横断し、社会課題解決につなげていきたいと考えています。



「空き家マッチングサイト」
WEB

「空き家マッチングサイト」
WEB

農業をまんやかに
作り手と消費者がつながる試み



堂版 3つ理由がありまして、教員として生徒に農業関係への就職を指導しながらも、彼らが将来、農業で生活できるのか疑問があった。そへ、教え子が本当に農業したいと相談してきて、同じタイミングで、高校時代の恩師から耕作放棄地の相談を持ちかけられました。見たら、いい土地やなあって、僕が江戸時代から城(農家の秀秀、農業後継者として、農業をもっと知ってもらいたいし、農業をしたいという人を後押しできる立場になったので、タイミングが重なって、よしよし退職して踏み出しました。

地 事業計画をやって新たに教員になったところへ

桂	専業農家をやって新たに発見したことは？
堂阪	20代、30代の若い人や会社の経営者が農業に興味があることを実感できたことです。アパレル会社の経営者の方と話した時に「農業に興味はあるけど、場がない」って話になって、「うちで提供してまっせーとトントン拍子に進んで。実際に、会社単位で農業体験に来られまして、今年も新たに何社か声かけられました。

桂	すごいですね。今後、若者が農業に関わりやすい環境が整っていくと感じておられますか。
堂	それは確実ですね。まず、兵庫県の農業の施策も大変です。農業って、生産物を作るだけってイメージですけど、有機農法や無農薬、自然農法と手法もいろいろ。さらに加工品を作ったり、農業体験を提供したり、農業が地域とのバランスをとりながらいろんなチャレンジができる雰囲気になっている。

桂 さっきの農業体験、純粋に楽しかった。でも、農業は本当に大変な仕事。だからこそ、労働力に見合うだけの収益があって、農業やってよかったって思えるのが一番いいですね。

堂 食べることで喜びですよね。さらに農業体験することでその価値自体が高まる気がする。食べるだけじゃない、経験も味になっていけば、豊かな人生になるんじゃないかなって。

桂 それが農業の魅力ですね。

ひょうごオープンファーム

農林漁業者が消費者を地域に呼び込み、体験を提供することに加えて、農林漁業者の思いや経験等を直接消費者に伝えることで、農林水産への理解を深めてもらう取り組み。兵庫県は持続可能な農林水産の実現のために支援事業を展開しており、堂阪さんはひょうごオープンファーム強化事業を活用した事業者の一人。



多文化共生社会
インクルーシブ

居場所・役割 寛容性

一方通行な支援ではなく 歩み寄りで「ここが居場所」と 思える社会に

国籍に関わらず、ひょうごに暮らす一人ひとりが自分らしく生きられる社会を創出するために、必要なことは？県内で外国人への教育支援に注力し、多文化共生分野の実務者会議で座長を務める乾 美紀教授にお話を伺いました。

外国人の子も私たち
関わって自分がグローバルに
成長してるなあって感じます



乾 美紀さん（兵庫県立大学 国際人間学専攻）
ラオスからのモン難民との出会いを機に、現地で調査を重ね博士号を取得、
専門は多文化共生教育・国際教育協力。

外国人への教育支援に興味を持ったきっかけは、アメリカでの「モン難民」との出会い、日本語教師として働いていた学校に、ラオスからやってきたのが役でした。言葉が通じなくても、同じアジア人同士、現地の子が敬慕する日本食も喜んで食べてくれたり、懐いてくれる子どもたちがとにかく可愛くて、アメリカ人に日本語を教えるより、モンの子どもに英語を教える方が楽しくなっていました。同時に、ラオスを追われることになった歴史的背景や現地の教育環境を探るようになって、今も研究を続けています。

帰国後、兵庫にもラオスの難民がいるのかな？と調べて会いに行くと、アメリカとの支援の格差にショックを受けました。特に教育面で、高校進学がままならない状況に苦しんでいる若者が多かったんです。同じ世代でも、アメリカと日本、どちらに生まれるかでこんなに違うのかと、一見、この国の国の人か分からない。自助組織がなかったり、そんな「自立しないマイソリテ」を助けたいという気持ちが強くなりました。人生に多様な選択肢を持つためにも、高校を卒業することが必要だと感じています。

もうひとつ、子どもたちに勉強を教えるボランティアに参加して感じるのは、居場所の大切さ。母語で読める、自国のことを自由に話せる場があることが嬉しいみたいで、勉強道具を持たずにお喋りに来る子もいるくらい。「先生、ネパール語喋れるへんの？」「ごめんなあ〜わからへんねん」と言っているのが救われて、気づいたらネパールカレーに詳しくなっていたり。私も視野が広がって、自分が「グローバル化」している実感があります。一方的な支援というより、お互いが歩み寄って同じ目線に立って理解を深め合う。これからの多文化共生に必要なことだと思います。まずはイベントを覗くだけでも。本場のフードや文化に触れながら、地域の外国人と交流するのも楽しいですよ。

多文化共生社会検討実務者会議

外国人県民の増加に伴い、日本語教育をはじめとする多様な課題への対応が必要であることから、実務者会議により県と市町が協議し、今後の取組を検討。

つなぐ。かんじる。こころみる。

子どもも、若者も、高齢者も、外国人も。地元への愛が結ぶ、人と人との絆。

加古川市 居場所・役割

「楽しい」を軸に 集う、考える、活動する。 まちが動く力になる。

心のモヤモヤは
もっと大事にしたほうがいい



「これからの社会には、モヤモヤをちゃんと出す場が必要」——そう話すのは、加古川市でNPO法人シミンズーズの代表を務めるすこすのひとり、柏木登起さん。大学卒業後、「社会全体を知るにはまず企業で」と考え、企業の営業職に。その後、人手が足りないから手伝ってほしいと言われたのをきっかけにNPO法人の職員になり、障がい者の就労支援事業所や他のNPO法人の立ち上げ支援などに関わったそう。その一方で、社会的な役割に意義を感じつつも、さまざまな社会課題に対して「組織への支援だけでいいのかと疑問に感じられたそう。その想いは「市民」の言葉が入ったNPO法人シミンズーズの名称に現れています。

「誰もが市民という役割を楽しむ社会へ」——柏木さんは法人の「らしさ」や価値をあらためて話し合い、これからの社会を見据えて、自分らしく生きるための環境を自分でつくっていくという「市民の自律と自立」に支援の焦点を当てています。「心のモヤモヤをもっと大事にしたほうがいいと思っていて、地域だけでなく、組織でもそう。おせっかいかもしれないけど、みんながモヤモヤしていることを話して、自分のやりたいたいことを実現できる場があればいいですね」。



柏木さんのインタビューはこちらでも読めます

すこすとは

「自分×仲間×地域、の熱量を伝える」ひと、「すこす」とを紹介するウェブサイト。すこすとは、私たちの活動を通して、地域の活力となる「参画と協働」のヒントを発信している。



「すこす」WEB

周囲とのつながりが
前向きにさせてくれたのかも



暖れやかな表情で言葉を交わす木南さん（左）と山崎さん（右）



他にもたくさんの記事を読めます

リメンバー117

公募で集まった18歳から625歳までの14人が、阪神・淡路大震災や防災についての記事を作成し、震災30年事業の締めくくりとして同事業の特設サイトで発信する県のプロジェクト。



「リメンバー117」WEB

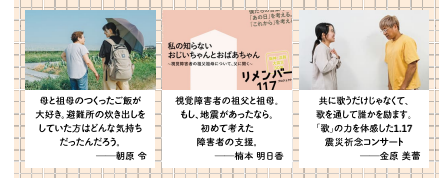
次代につなぐ 安心して暮らし

自分たちの言葉で 「あの日」を考える。 「これから」を考える。

阪神・淡路大震災から30年。当時はまだ生まれていなかった若い世代が、自分たちで考え、取材をし、自分の言葉で綴る「リメンバー117」プロジェクト。ある人は避難所の炊き出しについて、ある人は東日本大震災で神戸に避難してきたクラスメイトについて記事を書きました。その中の一人である山崎天智さんは就職活動中、大学4年生で震災を体験した木南さんに話を聞くことに。「木南さんは被災直後の3月に留年が決まって大学院進学を断念し、急遽、就職活動をするようになったそうです。被災、留年、就職。そんな中、ボランティアとして被災者支援にも積極的に動かれました。私が同じ立場なら込んで立ち直れないと思うのですが、なぜ落ち込まずにいられるのですかと聞くとうせ生きてやったら、楽しく生きた方がいい」と話されたんです。取材を通して自身の就活の不安やその原因などに気づき、前向きにいられるヒントを見つけたそう。

また、グランピングでのある出来事を題材にした松林善孝さんの記事では、真冬のグランピングでエアコン故障、1人あたり6〜7分しか使えないシャワーなどから、「当たり前」「当たり前」であるのは、じつはすべてにおいて「不自由なく、意思を受け付けているからだ」と語っていました。1995年1月17日を経験した人だけではない、それぞれの世代や立場で考える「あの日」、兵庫の未来を拓く大きな力になるはずです。

こんな記事も、あんな記事も



淡路市 居場所・役割 安心して暮らし

地域に支えられて。 子育ての拠り所にもなる助産院

出産を機に神戸からふるさとの淡路島にUターンした助産師の藤岡夢子さん。住み始めてから気づいたのは「今の淡路島には移住者が多いこと、しかし移住者は、両親が近くにいなくて、友達づりが難しいこともあり、とくに出産・育児で孤立する人もいるのではないかと考えたそう。そこでどんな人でも助けを求められる、相談できる場を立ち上げよう、思い切って助産院を開業しました。とはいえ自身も子育て真っ只中、24時間365日助産院にかりきりになる中、小学1年生の娘さんの話し相手に近所のおいちゃんがなっていたり、知らないおばあちゃんが「ちよっとお菓子食べていき」と声をかけてくれたり、「この地域では、今もまわりの人が一緒に子育てしてくれているんだって、身にしみて感じています」と自身の小さい頃と重ね合わせる藤岡さん。

実際に頼るところがなくて夜中に「助けほしい」と電話がかかってきたこともあるそう。「2、3時間お子様を預かってゆっくり寝てもらいました。そうしたらお母さんも笑顔になって、その経験から、最近は一時期かりも始まりました。誰かを頼って子育てするって悪いことじゃない。私はみんなにそう言っているんです。うちの子も私が周りに頼ることで、たくさんの人に育ててもらって、めちゃくちゃ愛されているなと思っていますから」。藤岡さんが目指すのは、出産だけでなく子育てで困った時にも帰ってこられる場であり続けること。誰もが安心して子育てできる社会を実現するための大きな一歩がスタートしています。

藤岡さんの動画も観られます

ひょうごビジョン2050

人口減少、少子高齢化、グローバル化、技術革新、気候変動など、社会が直面する大きな変化に対応し「兵庫らしい未来」を創造するための指針。ウェブサイトで、実際に目指すべき未来の実現に向けて新しい生き方・働き方を考え行動を始めている人たちを紹介。



「ひょうごビジョン2050」WEB



もっと誰かを頼って
子育てしたいといい！





山と水、美しい自然があるからこそ、おいしさ満喫！

丹波市 地域の固有性 ひとの動き

五国の魅力を五感で楽しんでみる

2025 年 大阪・関西万博をきっかけに始まった、県内全体をパビリオンに見立てた「ひょうごフィールドパビリオン」。五国それぞれの魅力がある兵庫県は、実際に足を運べば、地域ごとの自然や文化を楽しむことができます。「USH」プロジェクトのスタッフが丹波篠山を訪れ、そのならではの魅力に迫りました。

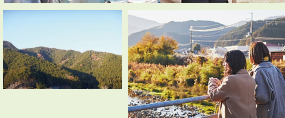


① NさんはUSHスタッフ内でも随一の旅好き・お酒好き。広報ディレクターのKさんは、丁寧な暮らしぶりとお酒好きのギャップが魅力。つまり、ふたりの共通項は「お酒」です。まずは日本六古窯のひとつ「陶の郷」で、お気に入りの酒器を選んで、体験スタート！

② 続いて170年以上の歴史をもつ西山酒造場でも、ものづくりの裏側を見学した後、5種類の日本酒を次々と試飲。本日のお気に入りの酒を選びます。美味しいお酒に合わせるために、地元の新鮮な野菜を味土屋館で仕入れました。

③ そして、目指したのは農校活用施設の「FOREST DOOR-旧神楽(しくら)小学校」。ふたりが「青空宴会」の場に決めたのは開放感ある校庭の朝礼台です。テーブル兼椅子として、さらにKさん持参の野間ゆ(のかんろ)で熟熱も準備。

④ 青空のもと気持ちのいい風を感じ、山の迫力と美しさを目で楽しみ、丹波篠山の酒器やお酒も食材の香りも味も密にたえたたっぷり堪能。ふたりともいっしょ以上に話げ弾んできました。でも、五国の魅力はこれだけではありません。皆さんも、ぜひ五感で体験してみてください。



こちらで詳しい記事が読めます！

万ばくばく一勝手に楽しむ「ひょうごフィールドパビリオン」(USH)

摂津・他・丹波・篠山・丹波という兵庫五国の魅力を再発見し新たにづくつく(USH=United Skoku of HYOGO)を体験し、おいしいもの・美しいものに触れながら地域の魅力を発信するウェブメディア。



「USH」方は「は」WEB

経済活力

一人ひとりが地域の できることは？ 一学校園で学び、考える一

ある日、芦屋市立西蔵こども園の5歳児が、使われなくなった旧園舎にお散歩に出かけたときにこうつぶやいたそうです。「このあじさいは皆に見えてもらえなくてかわいそう」。そこで一人一本ずつあじさいを園に持ち帰り、挿し木に挑戦！現園舎の目の前にあじさいの花壇をつくり、「にしくらカラフルあじさい通り」と命名することに。他にも植え替えの方法、肥料の種類、腐葉土づくりなどあじさいを通して学び、さらに近隣の高齢者とのつながりを生み出すなど、主体的なSDGsへの活動は「ひょうごSDGsスクールアワード2024」に選出されました。



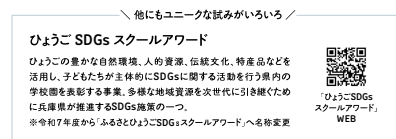
「このあじさいは元気がないねえ」「どうしたらいいかなあ？」

他にもユニークな試みいろいろ！

環境を守るために



また、日本海に面した香美町の香美町立栗山小学校に通う子どもたちは、自分たちの生活を支える地元で海でカヌーを体験し、身の回りの環境や自然を体験しながら学び、その素晴らしいさを再発見する授業が行われています。また、地域の人を講師に招いて海の漂着物調査も実施。近隣の環境を見つめ直したり、将来の環境を考えたことで持続可能な環境保全への一歩を踏み出しています。ひょうごの豊かな環境を未来に残すためのユニークな試みが、さまざまな学校園で始まっています。



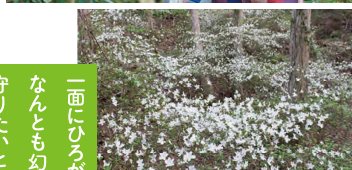
あれも、これも。

まだまだある、地元を愛する

こんな取り組み、あんな取り組み。

川西市 次代につなぐ 安心した暮らし

自然と共に。自分たちの森を自分たちで育てる



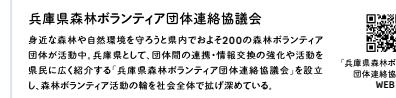
一面にひろがる白い花。なんとも幻想的で……、守りたいと

コナラ群落に咲く(シロバナ)センブリ。4月下旬に満開を迎える。



活動の拠点である森で自然観察会も実施し、子供たちも大いに楽しんでいます。

たったひとりで始めたゴミ拾いから、森を再生させてしまったボランティア、それが、菅原八重子さんです。植物が好きで菅原さんは近所を散歩していた時、ゴミだらけで荒廃してしまった森に驚きます。「荒れ果てた森は怖くて住民も近づかない場所」になっていたと危機感を覚え、片付けを開始。ひとりで森を刈り、倒木を片付ける際に、次第に仲間が増えていきました。4年後、ボランティアの手により森は本来の姿を取り戻します。さらに偶然見つけたメロバウセンツツジの保全活動を経て、今ではイベント開催や小学校の森林環境学習を受け入れるほど、多くの人が関心を持つ森に育ちました。また他地域では、竹林が手入れ不足など周囲の森林を圧迫することから、タケノコ掘りや伐採などにより竹林や周囲の森林を保全する活動もあります。「自然は単なる資源ではない。人が手をかけ共有して存在である」と、県内各地で日々行われているさまざまな森林ボランティア活動によって、人と自然が共存する豊かな森というバトンが次世代へと大に引き継がれています。

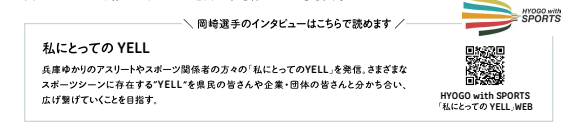


地域の固有性

スポーツの力で地域の一体感を高める

批判や、自分以外の選手の存在が力強いエールになった……。そう選手時代を振り返るのは宝塚市出身の元プロサッカー選手、岡崎真司さん。「僕は批判もエールと捉えています。認めてもらえないけれど、それでは満足しちゃう自分限界を決めかねない。批判は悔しいけれど'なんとしてやらう'という力になります」と断言。また海外でまったく注目されず辛かった時期には、「香川真司や柴崎岳という同じ境遇の選手の頑張りが、自分にとってのエネルギーになった気がする」とも。サッカー人生において「自分では行けない場所に手を伸ばし

続けるこれたのは、批判も含め'自分以外の存在'との出会いが根底にあったから」と実感しているそうです。現在は兵庫県と包括連携協定を結んだFCびすろ兵庫の理事を務めるなど、指導者側になりました。けれど選手時代と同じスタンスで、スポーツを通じた県民の盛り上げや地域交流に積極的に取り組み中。例えば、県内の小中高生が約100名も参加したサッカー教室は、岡崎さんの熱意溢れる指導で大いに盛り上がりました。「今度は自分の姿がエールになれば嬉しい」、岡崎さんのチャレンジは続きます。



行く人が変われば、楽しみがどんどん増えていきます！



三田市 地域の固有性 次代につなぐ

大学生が自分たちの視点で 博物館・美術館の魅力を発信

◆「5歳の私と同じ場所とポーズで写真を撮る!」と意気込み、人と自然の博物館を母と訪れたカズさん。当時の写真は、スラリと並ぶ標本の前で嬉しそうに大きく手を広げる姿。しかし、いざ現場に立つと「22歳の私には恥ずかしい」と躊躇します。時の流れは標本を充実させただけでなく自身の羞恥心にまで影響したのです。でもだからこそ発見も。阪神・淡路大震災の記録映像の前で竹むすみの姿を見て、「変化するのいい、でも変わらず後世に伝えるべきもの」と実感。時を経て「あらためて知る魅力」があると思えます。



幼少期のカズさん

◆常設展に魅せられ、1年に3回も歴史博物館を訪れたfleurさん。最初は観覧客で、玩具コーナーで各世代のなまじの玩具で盛り上がり、サボターズメンバーと訪れ、史学専攻のメンバーの解説でさらに魅力を発見。最後は久々に帰省した友人と全国のお城コーナーで話が弾みました。そこで得たfleurさんの考えは「常設展は何度でも楽しめる!」。一緒に見る相手が変われば、新しい感動を得られるということを発見したのです。

——学生ボランティアたちが感動や発見を等身大で発信する「HYOGOミュージアム魅力発信プロジェクト」。今日もまた新たな魅力を伝えようと奔走しています。

——学生が書いた記事は他にも！

